



記紀によって記紀 を正す



実年代が正しければ記紀は
ここまで復元できる

湊 學季著

はじめに

はじめに

本書は、日本の古代史研究にとって「古事記」および「日本書紀」にある改竄された年代、記紀年代がどのようなものであるのかを解明し、それを正しく復元したら、今まで謎としてその解明に一步も踏み出せないでいる史実が、どのように見えてくるのかをお知らせしたく、公開するものです。従ってその根本は記紀のような虚の年代ではない、実の年代を基に考えを進めていくということで、従来の考え方とは全く異なる新しいものです。そこには私自身がまさかと考え込んでしまうような発見もありましたが、絶対的な年代という自信を持って独自に考えを進めています。そしてその根拠は拙書『改竄された記紀と古代日本』によっています。本来ならば拙書にあるように、グラフなどによって古代史観を、理解しやすく図示したいところですが、簡便にして満足できる手法が見つからず、文字情報のみにて纏めてあります。したがって記紀年代から実年代への変換などの根拠や、古事記・日本書紀の実年代のデータ比較から、論理的に真の大王系譜を顕在化させるなどの、記紀によって改竄され、潜在している部分の復元の詳細については、是非巻末に紹介いたしました拙書をお読みいただくようお願いいたします。ただし不親切ではありますが、記紀にある記事を重複して載せるなどの、無駄を省いておりますので、これだけではお分かり頂けないかもしれません。ぜひ記紀関連書にも目を通していただき、併せてご批判賜れば幸いに存じます。

記紀を考え直す

記紀を考え直す

古事記・日本書紀は日本の唯一の古代文献であります、そのままでは史書として扱えないことは、異論がないことと考えます。しかしこれが改竄の結果であると断言する人は、それほど多くはいないでしょう。改竄であれば元史料はどうだったのか、を確たる根拠をもって示さなければならないからです。史実を正しく伝える古文献があれば、それに勝る物はないでしょうが、それがないのです。よく考えてみれば記紀以外にない、ということも不思議なことではありますが。しかしでたらめなことを後生につたえる、しかも個人ではなく、組織として記録に残すような行為は、先ず考えられません。記録の手法や文字の問題は別として、記録とは本来正しいものであると考えます。

ではなぜ記紀が、史実を素直に反映させないものとなってしまったのでしょうか。ここが問題です。先ず目に付く率直な疑問、享年が100才を超える大王が、10数代存在していることではないでしょうか。本当に記録に残っていたとは考えられません。ではでたらめかということになりますが、それを然るべき根拠をもって断言するところまでは至っていないようです。要するに今もって記紀の本質には至っていない状態で、只々記紀が敬遠されているかのようなのです。そのような現状ですから、日本の古代史に関心を持って、古代史関連の本をいくら読んでみても、諸説あって真相がつかめず、後味の悪い思いをすること請け合いとなるのです。邪馬台国問題しかり、倭の五王問題しかりです。ですから最終的には自分で納得のいくように考える、これしかないのです。古代史に関しては多くの人々が自分なりに考え、学説などを心底信じているわけではないでしょう。私もその一人となりました。ただし私は歴史に関する知識も、常識もない全くの門外漢です。記紀に対する無謀な挑戦を、どのように仕掛けるかということになります。技術系の私にとってできること、その最初の取り組みは、記紀年代の実体がどのようなものなのかでした。それは殆どの大王について、せっかく載せてある書紀の生年データをもとに、歴代をグラフにしたら、全体がどのようなものになるのかということでした。このデータは何も書紀から拾い出さなくても、歴史辞典などに表にして纏めてあるものもあり、誰でも利用できる、特別な史料ではありません。

記紀の中身を読んでも、何を言わんとしているのかよく分からない。歴史の門外漢が、文言を離れて何かを引き出そうとするには、そのくらいのことしかできなかったのです。そして文言を離れて、記紀の歴代年代データのみに関心を持って、いじったり眺めたりしているうちに、驚くほどの人為的な整合性があることに気がついたのです。これこそが享年100才を超える、人為的な年代操作による、改竄の事態として見えてきたのです。

人為的であるとしたのは、世代と生年との直線関係が、ある代数で突然折れ曲がるということなのです。それは古い時代を遠くにもっていき、引き延ばし行為なのです。この引き延ばしとは当然ながら寿命が実の年齢より引き延ばされます。その操作は683年の天武の時代までになり、それ以降の年代は真実の年代となっているのです。また古事記と日本書紀とでは、古い年代で引き延ばし方が異なり、さらに古事記によって操作された系譜を元に、史書として極力年代を明

記するという方針や、それでも万世一系を装わんとする無理から、書紀の方がより悩み苦しんでいる。ということが感じられます。

これは今まで誰一人として調べたことのない、私一人の発見でした。それらは記紀年代が人為的かつ論理的に、みごとに引き延ばし操作がされていることの発見でした。これこそが太古から自然界にはあり得ない人の歴代、不思議でもなんでもなし、まさに改竄のあからさまな事実だったのです。

年代が人為的に、しかも整合性をもって操作されている、という事実は重要です。この整合性をもった操作の痕跡をたどれば、正しく復元できる可能性を秘めているからです。この復元出来る可能性があることは、記紀年代が改竄されていることの証明であるとともに、記紀がおかしくなっている大きな要因です。記紀物語は当然のことながら、実の年代と記紀年代という虚の年代とをうまく融合させなければならないという、苦し紛れな操作が付随してくる筈です。

さらに古事記と日本書紀とで引き延ばし方が異なり、年代が一致していないことも、記紀をさらに複雑にして難解な史書にしているのです。要するに記紀は史実を別の年代(虚の年代)にこじつけて、編纂されているということなのです。書紀年代は神武から天武の683年迄の人為的に操作した期間は、そのままでは論議出来ないのです。

私はこの記紀年代を実年代に変換することを考えました。その範囲は683年以前についてとすることになります。それにはごく初歩的な数式を用いることができました。そして古事記の年代も日本書紀の年代も実年代という、同一の年代軸で比較できるようになりました。その詳細はここでは省き拙書に任せますが、この記紀年代を同一の実年代に復元し比較してみて、改竄される前の元の年代データ、即ち記紀が発刊される前までに記録されていた史料(国史のようなもの)は、古事記も日本書紀も同一の史料であったことも確認できたのです。ここで今その存在が分からなくても、記紀以前に記録されていた史料が、確実に存在したことが立証できたことになります。

記紀年代と実年代

さてここで実年代といっても、どのようにしてそれを検証するのか、ということが当然にして問題となります。しかし記紀以外の文献といっても見あたりません。記紀の中にそれを見つけなければなりません。それには記紀の記事で問題とされ、謎とされているものから拾い出す方が簡便でしょう。とくに外国の文献で、年代が明記されているものが参考になります。外国文献が年代操作をしているとは、考えられないからです。その謎とされているものに継体の没年問題がありました。そこには外国の年代が記されてある文献を取り込み、記紀物語の中で融合せずに、浮き上がったように見えるものがあります。変換年代のチェックにまたとない重要なデータとなります。

その記事とは「日本書紀」の継体の没年記事に挿入された、「百濟本記」の抜き書きなのです。要約すれば、西暦531年に安という大王と太子および皇子がともに、亡くなったというものです。これを継体が非業の最期をとげたなどと、間違っはならないのです。記紀には継体の子孫がともに亡くなったとは書いてありません。大体記紀年代は遠くに引き延ばされています。継体紀にあるからといって継体に関する記事とは限りません。私の作成した実年代では531年は、雄略の時代となりますが、これがおかしいのです。なぜなら安康から雄略の時代へ代わるとき、書紀にはこの頃王位を巡る、殺戮線があったことが記されています。その物語とは安康が幼年としか考えられないマヨワ王に殺されるなどの、何か史実を隠しているような不自然で奇妙なものなのです。

そして何よりも大王・皇太子・皇子がともに亡くなるという事件は、この安康の時代において他にはありません。大王安とは安康大王のことだったのです。だからといって安康という漢風諡号が付いていたということではなく、おそらく実名にアンと読ませる文字があったのでしょう。そしてこの殺戮線で生き延び、安康の没後即座に大王に即位したのが、書紀に大悪の大王とまで言われてのけられた、悪名高き雄略なのです。悪名にされている理由もここにあったのでしょう。これは雄略の起こしたクーデターと考えられるのです。外国の人にも大きな事件として記録されたものと思われます。

なおこの安康の没年をめぐるは、古事記では没年を明記することを避けています。書紀では元史料にあったと思われる衝撃的な実年代、531年を避けて安康の死を525年として、その上で年代の引き延ばし操作をしています。データを記と紀で比較して、相互の矛盾を検討してみると、何と継体・安閑・宣化は兄弟となりなります。そして継体は系譜上無理やり安閑・宣化の親とされ、これら一連の改竄の影響が、仏教の公伝の年代を巡る問題など、後の欽明時代を考える上での混乱の要因になっているのです。それらの根拠は拙著『改竄された記紀と古代日本』に、記紀データの解析をして論理的に導いてあります。またその他の謎が芋蔓式に解明出来ることをもって、躓くことのない十分な精度のあることを証明してあります。

次に主として書紀年代から実年代に変換したものを、以下の表にしてありますが、2代綏靖から10代崇神までは、記と紀で享年が異なります。その理由としては即位年を基準に生没年を考

えますと、古事記の享年では血脈の関係や空位が出てしまうため、書紀ではぎこちなさが見えても、何とかして生没年を調整していることが考えられます。そして古事記は生年も没年も明記を避けているため、詳細な解析が出来ません。また古事記では、実年齢のままで享年を示しているものもあり、そこは古事記の享年をそのまま{ }括弧で示しています。古事記から実年齢に変換した享年は()括弧をつけて併記してあります。またそのほかにも系譜改竄に伴うデータ齟齬などで、書紀のみでは疑問が残り、古事記年代との照合により、データを解析して真実を求めた実年代を、*印で示して一覧表にしてあります。今後文献・考古遺物などで、記紀年代では何かおかしいなどの謎に躓いたときには、是非一度実年代での再考をお薦めいたします。ただしこの実年代と為政者の時代との関係は、根拠とともに筆者に著作権を有します。

為政者による記紀年代と実年代

為政者による記紀年代と実年代

		日本書紀による為政者略年				記と紀から変換した実年齢			
歴代	為政者	生 年	即位年	没 年	享 年	生 年	即位年	没 年	享 年
1	神 武	-711	-660	-585	127	153	169	193	41
2	綏 靖	-632	-581	-549	84	178	194	204	27{45}
3	安 寧	-577	-549	-511	67	196	204	216	21{49}
4	懿 德	-553	-510	-477	77	203	217	227	25{45}
5	孝 昭	-506	-475	-393	114	218	228	254	37(28)
6	孝 安	-427	-392	-291	137	243	254	286	44(37)
7	孝 靈	-342	-290	-215	128	270	286	310	41(32)
8	孝 元	-273	-214	-158	116	292	310	328	37{57}
9	開 化	-208	-158	-98	111	312	328	347	36{63}
10	崇 神	-148	97	-30	119	331	347	369	39(51)
11	垂 仁	-69	-29	70	139	356	369	400	45
12	景 行	-13	-71	130	143	374	400	419	46
13	成 務	84	131	190	107	*399	419	438	*40
14	仲 哀	149	192	200	52	*405	438	*441	*37
	神功皇后	168	(201)	269	100	405頃	442	463	?
15	応 神	200	270	310	111	*425	463	*476	*52
16	仁 徳	257	313	399	143	445頃	477	*504	?
17	履 仲	?	400	405	?	445頃	505	*506	?
18	反 正	?	406	410	?	465頃	506	*508	?
19	允 恭	?	412	453	?	*487	508	*523	*37
20	安 康	401	453	456	56	*493	523	*531	*39
21	雄 略	418	456	479	62	*483	*531	*548	*66
22	清 寧	444	480	485	41	518	542	545	28
23	顕 宗	450	485	487	38	521	545	546	26
24	仁 賢	449	488	498	50	525頃	547	554	?
25	武 烈	489	498	506	18	503頃	554	560	?
26	継 体	450	507	531	82	*532	560	*574	*43
27	安 閑	466	531	535	70	532頃	*574	*580	?
28	宣 化	467	535	539	73	532頃	*574	*580	?
29	欽 明	509	439	571	63	562	583	605	44
30	敏 達	538	572	585	48	581	606	615	35

31	用 明	540	585	587	48	583	615	616	34
32	崇 峻	?	587	592	?	?	616	620	?
33	推 古	554	592	628	75	*582	620	645	*64
34	舒 明	593	629	641	49	620	645	654	35
35	皇 極	594	642	讓 位		621	654	讓 位	
36	孝 徳	596	645	654	59	622	657	663	43
37	齊 明	重 祚	655	661	68	重 祚	663	668	48
38	天 智	626	668	671	46	643	673	675	33
39	弘 文	648	671	672	25	659	675	675	17
40	天 武	?	673	686	?	*643	676	686	*44
41	持 統	645	686	702	58	657	686	702	46
42	文 武	683	697	707	25	683	697	707	25

上記の表で(16)仁徳・(17)履中が、兄弟扱いになっているのは、記紀で非葛城系になっている人物として、カゴサカ・忍熊兄弟を当てたからです。允恭はデータ上葛城系に該当する人物がなく、人選することなくそのままになっています。しかし忍熊のニンが仁徳のニンを思わせるなど、まだいくつかの疑問が残っています。その他データを論理的に追求していきますと、継体・安閑・宣化は三兄弟となり、天智・天武は同一人物として考えざるを得ない、など今までの常識は覆ります。詳細については拙書をお読みください。

倭国大乱から邪馬台国時代

倭国大乱から邪馬台国時代

多くの古代史ファンにとって関心の高いことは、倭国の成り立ちを考える上で邪馬台国の問題だと思えます。年代はほぼ分かっていますが、所在地には決着がついておりません。しかしこの問題も記紀年代を正すことによって自ずと決定されるのです。

先ず邪馬台国時代に至る倭国の情勢です。記紀年代を正せば記紀に見る倭国大乱の時代とは、記紀の神代である彦火瓊々杵尊の時代から、いわゆる出雲の国譲りを含み、神武が東進して終焉していることが分かります。それが魏志倭人伝にある70～80年に及ぶ、いわゆる倭国大乱とされる時代に相当します。記紀年代を正せば、紀元前の遠い神代の昔話であるかのように思われていた物語が、魏志倭人伝にある倭国大乱のこととして捉えられるのです。だいいち記紀の中では倭国の大乱とおぼしきものは神武の東進しか見あたりません。倭国大乱とは記紀では神武が実年代で169年に、初期の大和政権をおこすまでの戦乱のことだったのです。記紀では大和政権のことしか書いてありませんが、その19年後の188年頃には卑弥呼の邪馬台国が成立します。おそらく今までの信仰を絆にしていた民衆には、新政権になじめなかったのではないのでしょうか。考古学的には信仰のシンボルが銅鐸から鏡への移り変わりのように感じられます。

倭国は西暦57年には奴国王が後漢の光武帝から金印を受けていますが、その倭の奴国王がどのような統治をしていたのでしょうか。彌奴国・姐奴国・蘇奴国・華奴蘇奴国・鬼奴国・鳥奴国などとの関係はどうだったのでしょうか。しかし奴国が大乱の後邪馬台国になったとは考えられません。奴国は邪馬台国の一員ですから。しかし倭国の統一を目指し、奴国を飛び出した一派が大和に狗奴国を興したことは考えられます。倭国の統一は九州地方では叶えられず、あくまでも瑞穂の国である近畿でなければならないという強い思いが窺えます。したがって記紀年代を実年代で考えれば、倭国大乱の後に卑弥呼を女王として共立した邪馬台国の時代とは、神武から崇神あたりまでの、いわゆる欠史8代として、学界などでは実在しないとして、決めつけられている時代に相当します。邪馬台国は卑弥呼を女王とした、国の代表権をもった王です。しかし神武以下に引き継がれた初期の大和政権には、まだ国の代表権はなかった筈です。記紀は実年代との関係か、それとも万世一系からはずれぬ邪馬台国を認めたくないのでしょうか、邪馬台国の関連記事が見あたりません。一方揺籃期の大和政権の歴代に関しても、国の代表権がないだけに、記紀の記事にもその活動が、国内だけの寂しいものになっていることが窺われます。

そのように邪馬台国と大和政権との関係は、直列ではなく並列の関係にあったのです。このように記紀を正しい年代で考えると、今まで考えても見なかったことが見えてくるのです。そうすると私見ではありますが、魏志倭人伝と記紀物語との対比によって、迷うことなく次のような構図が目に見えてきます。

それは、弥生時代に信仰の絆により連合していた倭国は、政治的な結合によって倭国の統一を目指す一団との間で、永い間戦乱を続けていました。それが魏志倭人伝にある倭国大乱でしょう。その大乱も神武の東進で終息します。しかし根強い倭国の信仰心はすぐには断ち切れなかったようです。それが邪馬台国を中心とした信仰を絆とする国家だったのでしょうか。当時の国の代表

は大和政権ではなく、邪馬台国の女王卑弥呼だからです。そして邪馬台国と大和政権との間で争いが起きます。この揺籃期の大和政権こそ、魏志倭人伝でいう狗奴国(毛野にも通ずるのでは)だと考えます。邪馬台国と狗奴国とは隣り合わせだったのです。その邪馬台国も崇神の頃、大和政権に吸収されたようです。

ここで魏志倭人伝にある邪馬台国への道筋についても考えてみたいと思います。この魏志倭人伝にある狗邪韓国から邪馬台国を目指す方位については、海上の方位はそのままでよいが、倭国の末廬国に到達するや倭人伝が説明する方位・東西南北を、反時計方向に90度回転させなければ、邪馬台国が遙か海上へ向かってしまうという問題があります。この問題に関してはなぜそうってしまったかは、この後に私見を述べてみますが、結論的に言えば古代にあっては倭国の方位は万国共通の自然方位、N・E・S・Wに対して90度回転して、それぞれ東・南・西・北と記していたということなのです。ここで記したとしても東をEと認識し日本語のヒガシと呼んでいたたり、南をSと認識しミナミと呼んでいたとは考えられないのです。要するに当時では東なる文字をN、南なる文字をSという、N・E・S・Wに対して、90度反時計回りに東・南・西・北と、文字を配していたということです。もちろん方位の呼び方は漢字の意味に関係なく、Nはキタ・Eはヒガシ・Sはミナミ・Wはニシと、倭人の言葉で呼ばれていたと思われます。このように当時は漢字を記したものは、地図などのごく一部のものに限られたでしょう。実際には一般の民衆には関係もなく何の混乱も起こらなかったと思います。このような誤った漢字表記に対して、国が政令で改めたと思われるものを日本書紀に見ることができます。それは成務5年の秋9月に「東西を日の縦とし、南北を日の横とし云々」という一文があるからです。現代においてこの当たり前のことが記事として書かれていることは、それ以前の方位表記がそうではなかったことを裏付けています。

ところで漢字がいつ頃から伝来したのかは分かりませんが、身近なものからぼつりぼつりと何文字かずつ伝わったものと思われます。中にはその漢字の意味するところを誤って伝わってしまったことも十分に考えられます。それが方位を表す漢字だったらどうでしょうか。古代の倭人は太陽を崇拝する民族であったと考えられます。その民族性はご来光に柏手を打つなど、日本人の心の奥底に脈々として現代にまで生きております。特に日輪が天高く輝き、その真下にあることを無上の幸せとして、自らの国土を文字通りの、日高見の国(倭国に対する自国の美称では)として誇りを持っていた倭人ならどうだったでしょうか。漢字の意味を東は日の上る方向と教えられても、日高見の方向に対する思い入れの強い倭人ならば、その東と南とを誤ることは十分考えられます。すると真の西(W)は北とされてしまでしょう。そしてその名残が現代にまで引き継がれている地域があるのです。それは北九州と沖縄地方に見ることができます。

まず九州の地図で松浦郡を探して見てください。東松浦郡が二つと西松浦郡・北松浦郡が見つかると思います。そしてその地域が真の東と北とに東松浦郡、真の南に西松浦郡、真の西が北松浦郡となっていることなのです。真の東が東松浦郡とあるのは、もとは南松浦郡であった公算が強いのです。また沖縄地方では真の方位である自然方位と民族方位とに回転ズレがあり、真の西を北と言うことが知られていますが、これも風の向きにこじつけるよりも、古代からの名残として考えた方が合理的だと思います。方位は太陽の動きで決まるとはいえ、陸上を案内されて長距

離移動を重ねて旅するなどの場合は、距離とともに案内人に地図などで説明を受けなければ、道程を理解することは困難でしょう。滞在の地であれば隣国までの距離は別にして、見通せる範囲は指さして方向を示せば、魏の使者であれば方位は正しく確認できることと思います。

したがって倭人が魏の使者に示したと思われる、末廬国から邪馬台国までの道程は、正しくは北東500里で伊都国、北東100里で奴国、北行100里で不彌国、ここでどこかの港にでるはずで、そしてそこから北九州を離れ、船で東方へ20日間行くと投馬国、また不彌国の港より船で10日、徒歩ならば一月で邪馬台国に至るということになります。邪馬台国は投馬国までの半分の距離になり、投馬国(多摩国)が関東地方に当たるのです。狗奴国が邪馬台国の南であるということは、おそらく魏の使者に方角を指さして説明したから、正しく方位を捉えられたのではないのでしょうか。

さて倭国大乱の後の情勢を前述のように考えますと、神武と崇神の別名、「初国知らず」の意味も理解できます。倭国の統一は一度では達成できなかったということになります。崇神の時代となり今までの世を治めることが、祭祀という信仰が中心だったものが、人の考えを中心に行われる政りごとにも変わっても、それまでの倭人の信仰は捨てがたかったようです。記紀によれば崇神の頃疫病などで、民衆が不安を抱いた政情を鎮めるために、再び神を祭り始めます。出雲の時代から神と祭祀者とは別でしょうが、祭りごと時代では祭祀者が権力者であったと思われます。それが人の考えを中心に行われる政りごと時代になって、祭祀者と権力者とが分かれ、権力者が祭祀者を決定するようになります。

このときの神は当然ながら民衆の心情として、今までの卑弥呼時代の信仰を消し去ることはできなかったと思われます。私にはなぜか豊受大神が卑弥呼のように想起されてしまいます。そしてそれがやがて大和政権側としての神、天照大神が創作され、それが国として祀る伊勢神宮へと発展していくように思われてなりません。

ところでこの崇神の時代から倭国は統一を目指して、国の内外にまで積極的な活動を始めます。崇神の子孫は東国をおさめるために派遣されます。関東地方は邪馬台国の時代から重要な地であったことが窺えます。年代を正して見ればこの東国(毛野)に派遣された子孫が毛野の王であり、記紀では実名を伏せてはいるものの、大和政権に代わり、倭国統一の一環として東国で活躍した毛野の歴代が、倭の五王時代の世襲された人物として見えてきます。そして実の年代では景行から仁徳あたりの時代に相当します。私にはこの倭の五王の活躍が一人の日本武尊の活躍として物語られていると考えます。またこの時代は次に述べるように実名では獲加多支鹵大王(応神)、そしてそれを左治したヲワケノオミの活躍した時代にも重なるのです。常陸国風土記に見える倭武天皇の活躍とは、倭の五王の活躍とは違う、東国を行幸したワカタケル大王一行の活躍です。

記紀に見る獲加多支鹵大王

更に古事記と日本書紀とを実年代で比較することにより、西暦471年は応神の時代となり、記紀系譜では実名が見あたらないという、大王系譜までもが改竄されていることも明らかになります。その一部をお知らせすれば、応神大王とは人物名が葛城氏である誉田別ではなく、埼玉県行田市の稲荷山鉄剣銘で実名が明らかになった、ワカタケル（獲加多支鹵大王）であり、記紀系譜では人物名が品陀真若王とされ、真の大王系譜からは抹殺されていることが分かります。ワカタケルは成人するまで神功皇后(五百城入姫)に大事に育てられています。またこのワカタケルは七支刀銘にある、倭王旨であるとも考えられます。ワカタケル大王の生まれ・即位・没年を実年代で示せば、それぞれ425年・463年・476年となります。

このワカタケル大王は鉄剣銘にある実年代が、西暦471年に相当することから、記紀年代が引き延ばされた虚の年代であることに目をつぶり、ここだけは記紀の雄略大王の年代に重なることと、雄略の名が大泊瀬幼武をもってワカタケルは雄略であると、異論がないかのように決めつけられています。これでいいのでしょうか。確かに虚の年代における雄略と、実の年代における応神とは一致します。このように虚と実がある記紀の本質が議論しつくされてもいないのに、単純に決めつけることは大きな問題です。記紀年代はここだけが実年代に一致しているのでしょうか。記紀年代を全体に亘って考えるときに支離滅裂となる大きな問題を孕んでいます。

ところで文言にかじり付いて記紀を考えたいのなら、文言から記紀を眺めても書紀には、応神なる人物がすり替えられていることと、応神・雄略との年代相互間に何らかの示唆を与える一文があるのです。

書紀の応神紀には「応神が太子のとき、越の国である角鹿の気飯大神に拝礼した。このとき大神は太子と名を取り替えて、大神が去来紗別神、太子が誉田別尊になった。」という訳の分からぬ奇妙な一文があります。なぜこのような訳の分からぬ一文を挿入したのでしょうか。私にはこれを厳密に理解し説明することはできませんが、史実ではない書紀編纂時の作り話であり、応神なる大王が系譜上葛城氏にすり替えられていることへの示唆であると考えています。ここでいう大神とはワカタケルであり、系譜上品陀真若王とされている真の応神、誉田別尊とは武内宿禰の孫となり、葛城氏になります。

私が記紀年代を正して復元した系譜では、真の仁徳・履中は応神の子としか考えられず、兄弟として考えていますが、非葛城氏の誰に当たるかには迷いがあります。当初私は履中である大兄去来穂別は、データぎりぎりののところで、葛城氏ではないかと考えていましたが、大神が去来紗別神であるならば履中は去来穂別として、非葛城氏である系譜のつながりを窺わせます。

また書紀の雄略紀には次なる一文があります。それを私なりに要約すれば、「飛鳥戸郡の人田辺史伯孫が古市郡の人、書首加龍に嫁した娘の男子出産の祝いに行き、月夜に帰路にたった。イチビコの丘にある誉田の陵（応神陵）の下で、赤い馬に乗った人に出逢った。その馬は俊敏・駿足で伯孫の馬葦毛には及びもつかない駿馬であった。伯孫はその駿馬が欲しくなり葦毛と交換し

てもらい、挨拶して分かれた。伯孫は飲んで赤毛を驟して厩に入れ、鞍を解いて馬草を与えて寝た。するとその翌朝、赤馬は埴輪の馬に変わっていた。伯孫が怪しく思い、誉田の陵に引き返して探してみると、葦毛は埴馬の間にあった。そして赤毛の埴馬と取り替えた」というものなのです。

これが史実であるわけがないことは誰にもわかることでしょう。しかしこれを敢えて雄略九年秋七月一日のこととして、記事にしていることを考えなければならないでしょう。これもまた書紀編纂時に作られた話であり、文意を厳密に追求する必要はないと思いますが、大雑把にとらえれば応神の陵墓と雄略の時代との間の、時空をこえた物語となっていることなのです。それは雄略の時代として設定されてはいますが、話としては応神時代の赤馬と、雄略時代の葦毛の交換という、異なる年代の時空を合わせて、実は何れも埴馬であった、としていることです。単に埴馬の交換としていないことに、作り話の工夫が感じられます。これこそが改竄された年代と、実の年代との相互の関係、つまり書紀でいう雄略の年代は、実の年代では応神の時代である、との関係を示唆している物語ではないでしょうか。記紀を正しい年代にして記紀を眺めれば、このようなことで一見無意味のような記紀文言も生きてくるのです。

記紀に見るヲワケノオミ

ところでワカタケル大王を左治した実在の人物、ヲワケノオミは記紀系譜ではどこの誰に該当するのでしょうか。その系を別に求めなければなりません。しかし記紀では真の応神であるワカタケルを抹殺しています。当然のことながら、その時代に実在したヲワケノオミも抹殺されていることでしょう。しかしヲワケノオミは、ワカタケル大王(応神)の治世に活躍した実在の人物ですから、記紀系譜にあるとすれば応神の時代にあるはずです。私はこれを記紀系譜にある若野毛二俣王であると考えました。もちろんこれが実名であるはずがありません。ヲワケノオミは安倍氏である大彦から8代目であり、応神の時代に重なることと、その子孫が日下(ひのもと)とも称した安倍氏の陰を感じるからです。記紀系譜では応神の子になっていますが、これも改竄によるものでそのまま鵜呑みにはできません。おそらく豪族であるヲワケノオミの子孫が、実際に継体大王に繋がるための系譜の操作であると考えます。万世一系を唱えることに大きく外れてしまうことからの作為でしょう。ヲワケノオミの系譜は、稲荷山古墳から出土した鉄剣銘に、①大彦・②タカリノスクネ・③テヨカリワケ・④タカヒシワケ・⑤タサキワケ・⑥ハテヒ・⑦カサヒヨ・⑧ヲワケノオミとなっています。またヲワケノオミを若野毛二俣王とみなすことにより、その子孫は意富々等王・乎非王・汗斯王・乎富等大公主(継体大王)にまで繋がります。そしてその歴代の代数は大彦から12代になります。ここで大彦は開化大王と兄弟ですから、実年代で大彦の生年を開化の生年312年頃として、継体の生年532年までの世代間の平均年数を求めますと20年となります。この世代間の年数20年は、古代では正しい血脈の歴代という証にもなるのです。

またこの辺りの年代における、世代の尺度を明確に示しているこの系譜は、極めて重要であると考えます。記紀が刊行されて以来、国造などの古代文献の系譜は、一様に世代の中程を明確に示さず、何々8世孫などと代数をもって間を繋げています。これは分からなかったからではなく、おそらく記紀との齟齬をきたすものとして、権力による介入があったからだと思いますが、曖昧にして記紀との照合を困難にしています。しかしこのヲワケノオミ系譜は、記紀年代を正してみれば、大彦の8代孫として、応神時代に活躍した人物に相当するのです。また記紀系譜にある若野毛二股王の子孫は、継体に続くれっきとした歴代になります。記紀系譜にある人物名は全てが実名とは限らず、系譜の改竄に伴う創作されたものがあることに、惑わされてはならないのです。記紀年代を正すことにより、ここまでのことが分かるのです。

この継体大王とは記紀データを解析してみれば、実年代で532年に生まれ、574年に没し、安閑・宣化とは三兄弟と考えなければなりません。また記紀を離れて考古遺物を参考にしますと、隅田八幡宮所蔵の人物画鏡にある銘文から、癸未年は真の年代として563年と考えられ、まさに男弟王であると決まり、迷うことなくずばり日下王とも呼ばれた継体大王になるのです。若野毛二俣王が応神の子孫として大王系譜に持ち上げられています。もちろん正しくは豪族であり安倍氏系に属します。しかも継体は即位した年齢29歳からして、当然ながら既に子があったとしなければならず、それが欽明の兄の麻呂子(大麻呂)であると考えられ、子連れで56

0年に大王に即位したことになります。またこの欽明大王は実名がないなどとして知られていますが、実年代で562年に生まれ605年に没した人物となれば、『隋書』の「開王20年（600年）、倭王あり、姓は阿每、名は多利思比孤、阿輩鷄弥と称す」として捉えられるのです。そして欽明の実名は多利思比孤と決まります。同時に記紀編纂者は海外の史書を調べ、いかに実年代と齟齬をきたさないように気を配っていたかが分かります。

このようにして、応神とは記紀系譜上では品陀真若王とされている実名ワカタケル、記紀系譜名で若野毛二俣王とされている人物は、実名ヲワケノオミと考えられるのです。ここではっきりと断言します。鉄剣銘にある獲加多支鹵大王とは、雄略ではなく応神に他なりません。

倭の五王と日本武尊

ところで記紀は何で景行の時代に、オウスなどという実在が疑わしい人物を創作し、それをヤマトタケルに仕立てたのでしょうか。それはいわゆる倭の五王の問題です。それは中国の史書『宋書』にある5人、讚・珍・濟・興・武なる、実名を中国流に省略された倭人の遣使記事で、遣使が413年から502年にかけて行われていることから、それらの王を倭の五王としているのですが、これまで人物像を巡っての決着がなされていません。そしてこの413年から502年にかけては、実年代では倭の五王の活躍とともに景行から応神を含み、ヲワケノオミをも含む時代となります。そして倭国にとっても歴史的に重要な時代だったはずですが、しかし記紀では正しい年代で記録されている外国記事を、そのまま載せることは絶対にできないでしょう。

そこで倭の五王の国内における活躍を、あたかも日本武尊一人の活躍に凝縮して、物語を作ったのではないかと思われるのです。第一に、日本武尊の活躍の範囲が広範であることにあります。書紀にそれとなく示した実年齢、16才から30才までの短い間の活躍では、とてもなし得ないように思えるからです。それと宋書によれば、東奔西走したと見られる倭の五王が、国内で何も活動していなかったとも考えられません。何らかの史実が記紀に潜在していると見なければならぬでしょう。

そこで考えられるのが崇神の皇子として、東国に派遣された上毛野君・下野野君の始祖である、毛野の王なる子孫のことなのです。この毛野の王は書紀の景行の時代に、東山道15国の都督に任命されたとある、豊城入彦の孫の彦狭島王です。この都督なる官名は中国の役職名だそうです。そしてここに中国に派遣された人物らしき陰が見えるのです。毛野の王の東国での活躍らしきものは景行の時代から始まりますが、その親子関係は別として、彦狭島王以下、御諸別・荒田別・竹葉瀬・田道と世襲されます。この五王の名にしても実際の名であるのかどうかは疑わしいですが、この東国に派遣された毛野の王の役割とはいったい何であったのか、活躍らしきものが見あたらずあっさりしすぎて不思議です。中央から東国に派遣された皇子が、何の目的も使命もないということは考えられません。もちろんこの時代の大王達が、東奔西走したような記事も記紀に見ることはできません。ではいったい宋書にある倭国統一を目指すような、活発的な活動はどこに見られるかと言うこととなります。それは日本武尊の活躍とか神功皇后紀にある西征物語しか考えられません。そして倭の五王の活躍を分割して国内関係での活躍を、創作された日本武尊という一人の英雄の活躍に押し込めてしまったのです。しかしその英雄が虚の年代で、景行2年に生まれ、43年に没したオウス(実年齢では13歳)では話になりません。ただし書紀の景行紀にはオウスが16歳から活躍し30歳で没したという、実年齢で語られている話が重なっているところもあります。これはオウスではない実在の人物を当てたと考えられますが、いずれにしても一人の人物の、しかも短い生涯における活躍とは思えません。宋書にある倭の五王の存在は隠し、倭国の統一に大和政権が奮闘したことだけは物語りたいということなのです。

倭国統一の一環である東国における活動は、大和政権からわざわざ毛野に派遣された崇神の皇子、豊城入彦の子孫の活躍を抜きにしては考えられないでしょう。そして30才という短命

であった、日本武尊一人の活躍としては、超人的に過ぎる疑問にも、十分に応えることができるのです。西の熊曾を平定した話なども倭の五王に纏わるものではないでしょうか。またヤマトタケルが死の前に回想している話の中に、四頭だてで走る馬車云々といっていることなどは、なにか車の評とも言われた毛野の豪族車持氏を連想してしまいます。

東国を行幸した大王

東国を行幸した大王

ところで東国に行幸した大王が誰であるかということです。記紀では日本武尊をオウスとしたために、景行が東国を行幸したことにせざるを得ませんでした。実際には応神であることを示唆し、行幸地をごまかして載せたと思われるものがあります。それに関しては先ず、桓武平氏良文流で関東の豪族である、下総相馬郡を開発したとされる、千葉氏に由来する千葉なる地名です。この千葉なる地名の発生を考えたとき、かつて応神が千葉の葛野（葛飾野か）に立ち寄り、千葉なる地名が定着したのではないかと考えられるのです。

それは応神六年春二月に近江の国に行幸して歌ったとされる、「千葉の 葛野を見れば百千足る 家庭も見ゆ 国の秀も見ゆ」です。この歌を詠んだとされる近江の国への行幸については、書紀にはいっさい行動の記事がありません。だいたい葛であろうと他の植物であろうと、葉が多く繁っているところなどは、国内どこにでもありふれているでしょう。なぜ素直に考えて千葉の葛飾野ではいけないのでしょうか。これも書紀編纂者は応神が、武蔵国周辺にきたことを示唆しているものと思われるのです。

また私が記紀を正した実年代および系譜では、実名ワカタケル大王とは漢風諡号で応神、記紀系譜では五百城入彦の子孫である品陀真若王に相当します。そして稻荷山の鉄剣銘にあるように、それを左治した実名ヲワカノオミとは記紀系譜では若野毛二俣王であり、ともに関東地方で活躍したことは事実です。それは歴史的事実として民衆の記憶の中に残っている筈です。それが常陸国風土記なのです。常陸国風土記にはヤマトタケルが倭武天皇となっています。風土記は古事記が刊行された712年の翌年に撰進の命令が出されたそうですが、これは大和政権が古事記に対して、よほど気がかりなことがあったのではと勘ぐってしまいます。そのためかその後に刊行された書紀には風土記の影響が感じられます。常陸国の人々にも倭の五王の活躍が無関係であるとは考えられません。しかし風土記には記紀のような勇ましい、ヤマトタケルの話がみられないのはどうしてでしょうか。風土記は地元で伝わる昔話の収集です。当然史実が語られていたでしょう。そこには毛野の王の活躍や、ワカタケル大王およびヲワケノオミの行動も含まれていた筈です。風土記の草案は古事記が発刊された一年後です。そこにはワカタケル大王の話はあっても、古事記によって初めて創作された、オウスやヤマトタケルという人物の話はなかった筈です。風土記を編纂する役人にとっては、実名として地元の人々に記憶されているワカタケル大王を、倭武天皇とするのが精一杯のことだったのではないのでしょうか。そして風土記は後の720年に刊行された書紀に影響を与え、古事記にはないヤマトタケル物語が拡大しているのです。また千葉県に多い日本武尊に纏わる話も、ワカタケルとヲワケノオミ一行が行動した史実が、後世にまで語り継がれた結果であろうと思います。すると斯鬼の宮は千葉県とその周辺地にあった可能性を感じます。

ところでワカタケル大王が、東国の斯鬼の宮にいつまで滞在していたのかは分かりませんが、476年に没しています。ヲワケノオミはその後も東国にとどまり、蝦夷対策として倭の五王を支援したことは十分に考えられます。ヲワケノオミの没年は推定で482年頃と思われるが、

その時代の蝦夷はなかなか手強く、仁徳の時代になっても毛野の王である田道が、494年頃の蝦夷との戦いで伊峙（師）の水門で討ち死にしています。この田道は倭の五王最後の一人である武とされます。また書紀のヤマトタケルの物語には、ヲワケノオミの活躍も含まれているように感じられるのです。私には風土記にある黒坂の命の話などは、ヲワケノオミのこのように思えるのです。そして書紀になって新たに書き加えられた、日本武尊の活躍した実年齢16歳から30歳は、ヲワケノオミのものと考えられ、482年頃に没したと推測されます。

また私は伊師の水門を多賀郡十王町の、伊師浜海岸ではないかと考えています。そしてヤマトタケルの物語にあるいぶき山も、茨城県の伊師浜にあるいぶき山ではないかと考えています。多賀は竹の水門（タカノミナト）に通じるからです。現在この地区の古代は十王台遺跡のほか、はっきりしたものがありませんが、この多賀郡十王町辺りは文字通り、古代多くの王達が集結した激戦区のように思われるのです。十王なる町名の由来もそのようなことからつけられたように思われるのです。十王堂などの点としての存在から考えるよりも、それ以前から呼ばれていたと考えられる、十王川のような面的な広がりの中の町、で捉えた方がより説得力があるのではないのでしょうか。

それとヤマトタケルの行動は、よく水路を使っているように思われますが、書紀には応神が伊豆国に科して船を作らせたとあり、何か関係ありそうに思われます。このようなことからヲワケノオミと倭の五王との活躍とが分けられるかもしれません。

記紀に見るヲワケノオミ

ところでワカタケル大王を左治した実在の人物、ヲワケノオミは記紀系譜ではどこの誰に該当するのでしょうか。その系を別に求めなければなりません。しかし記紀では真の応神であるワカタケルを抹殺しています。当然のことながら、その時代に実在したヲワケノオミも抹殺されていることでしょう。しかしヲワケノオミは、ワカタケル大王(応神)の治世に活躍した実在の人物ですから、記紀系譜にあるとすれば応神の時代にあるはずです。私はこれを記紀系譜にある若野毛二俣王であると考えました。もちろんこれが実名であるはずがありません。ヲワケノオミは安倍氏である大彦から8代目であり、応神の時代に重なることと、その子孫が日下(ひのもと)とも称した安倍氏の陰を感じるからです。記紀系譜では応神の子になっていますが、これも改竄によるものでそのまま鵜呑みにはできません。おそらく豪族であるヲワケノオミの子孫が、実際に継体大王に繋がるための系譜の操作であると考えます。万世一系を唱えることに大きく外れてしまうことからの作為でしょう。ヲワケノオミの系譜は、稲荷山古墳から出土した鉄剣銘に、①大彦・②タカリノスクネ・③テヨカリワケ・④タカヒシワケ・⑤タサキワケ・⑥ハテヒ・⑦カサヒヨ・⑧ヲワケノオミとなっています。またヲワケノオミを若野毛二俣王とみなすことにより、その子孫は意富々等王・乎非王・汗斯王・乎富等大公主(継体大王)にまで繋がります。そしてその歴代の代数は大彦から12代になります。ここで大彦は開化大王と兄弟ですから、実年代で大彦の生年を開化の生年312年頃として、継体の生年532年までの世代間の平均年数を求めますと20年となります。この世代間の年数20年は、古代では正しい血脈の歴代という証にもなるのです。

またこの辺りの年代における、世代の尺度を明確に示しているこの系譜は、極めて重要であると考えます。記紀が刊行されて以来、国造などの古代文献の系譜は、一様に世代の中程を明確に示さず、何々8世孫などと代数をもって間を繋げています。これは分からなかったからではなく、おそらく記紀との齟齬をきたすものとして、権力による介入があったからだと思いますが、曖昧にして記紀との照合を困難にしています。しかしこのヲワケノオミ系譜は、記紀年代を正してみれば、大彦の8代孫として、応神時代に活躍した人物に相当するのです。また記紀系譜にある若野毛二股王の子孫は、継体に続くれっきとした歴代になります。記紀系譜にある人物名は全てが実名とは限らず、系譜の改竄に伴う創作されたものがあることに、惑わされてはならないのです。記紀年代を正すことにより、ここまでのことが分かるのです。

この継体大王とは記紀データを解析してみれば、実年代で532年に生まれ、574年に没し、安閑・宣化とは三兄弟と考えなければなりません。また記紀を離れて考古遺物を参考にしますと、隅田八幡宮所蔵の人物画鏡にある銘文から、癸未年は真の年代として563年と考えられ、まさに男弟王であると決まり、迷うことなくずばり日下王とも呼ばれた継体大王になるのです。若野毛二俣王が応神の子孫として大王系譜に持ち上げられています。もちろん正しくは豪族であり安倍氏系に属します。しかも継体は即位した年齢29歳からして、当然ながら既に子があったとしなければならず、それが欽明の兄の麻呂子(大麻呂)であると考えられ、子連れで56

0年に大王に即位したことになります。またこの欽明大王は実名がないなどとして知られていますが、実年代で562年に生まれ605年に没した人物となれば、『隋書』の「開王20年（600年）、倭王あり、姓は阿每、名は多利思比孤、阿輩鷄弥と称す」として捉えられるのです。そして欽明の実名は多利思比孤と決まります。同時に記紀編纂者は海外の史書を調べ、いかに実年代と齟齬をきたさないように気を配っていたかが分かります。

このようにして、応神とは記紀系譜上では品陀真若王とされている実名ワカタケル、記紀系譜名で若野毛二俣王とされている人物は、実名ヲワケノオミと考えられるのです。ここではっきりと断言します。鉄剣銘にある獲加多支鹵大王とは、雄略ではなく応神に他なりません

倭の五王と日本武尊

ところで記紀は何で景行の時代に、オウスなどという実在が疑わしい人物を創作し、それをヤマトタケルに仕立てたのでしょうか。それはいわゆる倭の五王の問題です。それは中国の史書『宋書』にある5人、讚・珍・済・興・武なる、実名を中国流に省略された倭人の遣使記事で、遣使が413年から502年にかけて行われていることから、それらの王を倭の五王としているのですが、これまで人物像を巡っての決着がなされていません。そしてこの413年から502年にかけては、実年代では倭の五王の活躍とともに景行から応神を含み、ヲワケノオミをも含む時代となります。そして倭国にとっても歴史的に重要な時代だったはずですが、しかし記紀では正しい年代で記録されている外国記事を、そのまま載せることは絶対にできないでしょう。

そこで倭の五王の国内における活躍を、あたかも日本武尊一人の活躍に凝縮して、物語を作ったのではないかとと思われるのです。第一に、日本武尊の活躍の範囲が広範であることにあります。書紀にそれとなく示した実年齢、16才から30才までの短い間の活躍では、とてもなし得ないように思えるからです。それと宋書によれば、東奔西走したと見られる倭の五王が、国内でも活動していなかったとも考えられません。何らかの史実が記紀に潜在していると見なければならぬでしょう。

そこで考えられるのが崇神の皇子として、東国に派遣された上毛野君・下野野君の始祖である、毛野の王なる子孫のことなのです。この毛野の王は書紀の景行の時代に、東山道15国の都督に任命されたとある、豊城入彦の孫の彦狭島王です。この都督なる官名は中国の役職名だそうです。そしてここに中国に派遣された人物らしき陰が見えるのです。毛野の王の東国での活躍らしきものは景行の時代から始まりますが、その親子関係は別として、彦狭島王以下、御諸別・荒田別・竹葉瀬・田道と世襲されます。この五王の名にしても実際の名であるのかどうかは疑わしいですが、この東国に派遣された毛野の王の役割とはいったい何であったのか、活躍らしきものが見あたらずあっさりしすぎて不思議です。中央から東国に派遣された皇子が、何の目的も使命もないということは考えられません。もちろんこの時代の大王達が、東奔西走したような記事も記紀に見ることはできません。ではいったい宋書にある倭国統一を目指すような、活発的な活動はどこに見られるかと言うことになります。それは日本武尊の活躍とか神功皇后紀にある西征物語しか考えられません。そして倭の五王の活躍を分割して国内関係での活躍を、創作された日本武尊という一人の英雄の活躍に押し込めてしまったのです。しかしその英雄が虚の年代で、景行2年に生まれ、43年に没したオウス(実年齢では13歳)では話になりません。ただし書紀の景行紀にはオウスが16歳から活躍し30歳で没したという、実年齢で語られている話が重なっているところもあります。これはオウスではない実在の人物を当てたと考えられますが、いずれにしても一人の人物の、しかも短い生涯における活躍とは思えません。宋書にある倭の五王の存在は隠し、倭国の統一に大和政権が奮闘したことだけは物語りたいということなのです。

倭国統一の一環である東国における活動は、大和政権からわざわざ毛野に派遣された崇神の皇子、豊城入彦の子孫の活躍を抜きにしては考えられないでしょう。そして30才という短命

であった、日本武尊一人の活躍としては、超人的に過ぎる疑問にも、十分に応えることができるのです。西の熊曾を平定した話なども倭の五王に纏わるものではないでしょうか。またヤマトタケルが死の前に回想している話の中に、四頭だてで走る馬車云々といっていることなどは、なにか車の評とも言われた毛野の豪族車持氏を連想してしまいます。

東国を行幸した大王

東国を行幸した大王

ところで東国に行幸した大王が誰であるかということです。記紀では日本武尊をオウスとしたために、景行が東国を行幸したことにせざるを得ませんでした。実際には応神であることを示唆し、行幸地をごまかして載せたと思われるものがあります。それに関しては先ず、桓武平氏良文流で関東の豪族である、下総相馬郡を開発したとされる、千葉氏に由来する千葉なる地名です。この千葉なる地名の発生を考えたとき、かつて応神が千葉の葛野（葛飾野か）に立ち寄り、千葉なる地名が定着したのではないかと考えられるのです。

それは応神六年春二月に近江の国に行幸して歌ったとされる、「千葉の葛野を見れば百千足る 家庭も見ゆ 国の秀も見ゆ」です。この歌を詠んだとされる近江の国への行幸については、書紀にはいっさい行動の記事がありません。だいたい葛であろうと他の植物であろうと、葉が多く繁っているところなどは、国内どこにでもありふれているでしょう。なぜ素直に考えて千葉の葛飾野ではいけないのでしょうか。これも書紀編纂者は応神が、武蔵国周辺にきたことを示唆しているものと思われるのです。

また私が記紀を正した実年代および系譜では、実名ワカタケル大王とは漢風諡号で応神、記紀系譜では五百城入彦の子孫である品陀真若王に相当します。そして稻荷山の鉄剣銘にあるように、それを左治した実名ヲワカノオミとは記紀系譜では若野毛二俣王であり、ともに関東地方で活躍したことは事実です。それは歴史的事実として民衆の記憶の中に残っている筈です。それが常陸国風土記なのです。常陸国風土記にはヤマトタケルが倭武天皇となっています。風土記は古事記が刊行された712年の翌年に撰進の命令が出されたそうですがこれは大和政権が古事記に対して、よほど気がかりなことがあったのではと勘ぐってしまいます。そのためかその後に刊行された書紀には風土記の影響が感じられます。これは大和政権が古事記に対して、よほど気がかりなことがあったのではと勘ぐってしまいます。そのためかその後に刊行された書紀には風土記の影響が感じられます。

常陸国の人々にも倭の五王の活躍が無関係であるとは考えられません。しかし風土記には記紀のような勇ましい、ヤマトタケルの話がみられないのはどうしてでしょうか。風土記は地元で伝わる昔話の収集です。当然史実が語られていたでしょう。そこには毛野の王の活躍や、ワカタケル大王およびヲワケノオミの行動も含まれていた筈です。風土記の草案は古事記が発行された一年後です。そこにはワカタケル大王の話はあっても、古事記によって初めて創作された、オウスやヤマトタケルという人物の話はなかった筈です。風土記を編纂する役人にとっては、実名として地元の人々に記憶されているワカタケル大王を、倭武天皇とするのが精一杯のことだったのではないのでしょうか。そして風土記は後の720年に刊行された書紀に影響を与え、古事記にはないヤマトタケル物語が拡大しているのです。また千葉県に多い日本武尊に纏わる話も、ワカタケルとヲワケノオミ一行が行動した史実が、後世にまで語り継がれた結果であろうと思います。すると斯鬼の宮は千葉県とその周辺地にあった可能性を感じます。

ところでワカタケル大王が、東国の斯鬼の宮にいつまで滞在していたのかは分かりませんが、

476年に没しています。ヲワケノオミはその後も東国にとどまり、蝦夷対策として倭の五王を支援したことは十分に考えられます。ヲワケノオミの没年は推定で482年頃と思われませんが、その時代の蝦夷はなかなか手強く、仁徳の時代になっても毛野の王である田道が、494年頃の蝦夷との戦いで伊峙（師）の水門で討ち死にしています。この田道は倭の五王最後の一人である武と思われます。また書紀のヤマトタケルの物語には、ヲワケノオミの活躍も含まれているように感じられるのです。私には風土記にある黒坂の命の話などは、ヲワケノオミのこのように思えるのです。そして書紀になって新たに書き加えられた、日本武尊の活躍した実年齢16歳から30歳は、ヲワケノオミのものと考えられ、482年頃に没したと推測されます。

私は伊師の水門を多賀郡十王町の、伊師浜海岸ではないかと考えています。そしてヤマトタケルの物語にあるいぶき山も、茨城県の伊師浜にあるいぶき山ではないかと考えています。多賀は竹の水門（タカノミナト）に通じるからです。現在この地区の古代は十王台遺跡のほか、はっきりしたものが見えていませんが、この多賀郡十王町辺りは文字通り、古代多くの王達が集結した激戦区のように思われるのです。十王なる町名の由来もそのようなことからつけられたように思われるのです。十王堂などの点としての存在から考えるよりも、それ以前から呼ばれていたと考えられる、十王川のような面的な広がりの中の町、で捉えた方がより説得力があるのではないのでしょうか。

それとヤマトタケルの行動は、よく水路を使っているように思われますが、書紀には応神が伊豆国に科して船を作らせたとあり、何か関係ありそうに思われます。このようなことからヲワケノオミと倭の五王との活躍とが分けられるかもしれません。

おわりに

以上は以前の私のホームページ『記紀によって記紀を正す』を、その後に考えが及んだものを加えて、平成17年5月に更新したものです。それにしても記紀とは不思議な史書です。それは一見改竄されてでたらめのごとくに見えても、記紀によって記紀を正す鍵が隠されていることです。また古事記と日本書紀との二書を必要とするなど、古代の記紀編纂者はなかなかの知恵者であったと、奥の深さに敬服します。なぜ似たような史書が二つもあるのか、という疑問にも何か応えているかのように感じられるからです。

そのように記紀が、古代史を考える原点であり、記紀を理解し尽くしたとは言えない、中途半端に構築された古代史観で、はたして日本の古代史を正しく論ずることが出来るのでしょうか。記紀以外の文献から得た知識で、こじつけの巧みさで論じられては困るのです。先ず記紀を正してからでないと、謎が増幅するのではと気になります。

また年代を相対的に論ずる考古学は、ともすると文献史学にすぎり過ぎているようにも思えます。もっと自信をもって絶対性を主張してもらいたいものです。あまりにも文献史学に反論する場面が少ないのはどうしてでしょうか。

古代文献には限りがありますが、遺跡の数はその比ではないでしょう。これからの古代史は、考古学によって語られるのではないのでしょうか。ねつ造は論外として、考古遺物は真実を語っているはずですが、ただしその年代が間違っていたら、日本の古代史は歪んでしまうでしょう。

さて以上のように古代史を私に言わしめる、私なりに見えてきた古代史像を、私見として、『改竄された記紀と古代日本』にまとめてあります。そこにはもっと多くの疑問に挑戦しております。そして今までの謎を売り物にした古代史観で良いよいのかどうかを、記紀と共に真剣に考えて頂ければ幸甚です。以下に拙書を紹介させていただきます。

書名 改竄された記紀と古代日本
ISBN 4-7952-2687-3
発行日 1999年4月2日
著者 湊 學季 (タカスエ)

発行所 株式会社 ストーク
〒270-2213千葉県松戸市五香1-13-12
電話 047-384-7671

発売元 株式会社 星雲社
〒112-0012東京都文京区大塚3-21-10
電話 03-3947-1021

